

大人用



伝道地便り

2020年 第2期 トランス・ヨーロッパ支部

- | | |
|----------------------|--------------|
| 第1話 「1万人に1人のアドベンチスト」 | セルビア |
| 第2話 「間違った選択」 | ポーランド |
| 第3話 「友なき人の友」 | フィンランド |
| 第4話 「霊的盲人への説教」 | ノルウェー |
| 第5話 「離婚後の赦し」 | トランス・ヨーロッパ支部 |
| 第6話 「靴磨きの友になる」 | キプロス |

ADVENTIST
MISSION

セブンスデー・アドベンチスト教団 伝道局 安息日学校部

伝道地便りの用い方のヒント

伝道地便りに収められているのは、現地からの一人ひとりの生きた経験です。安息日学校でこれを用いるときには、生き生きとご紹介していただきたいのです。そのためのヒントを、いくつか列挙いたします。

- 1) 前もって何度か目を通し、自信を持って読む。
- 2) 棒読みは避け、証されている大事な部分を明確にしておく。
- 3) 伝える時間はできるだけ短く。長くても5～7分。
- 4) 誰が、いつ、どこで、何を、なぜ、どうしたかが分かるようにする。
- 5) できたらカードに文字や絵を書くなどの視聴覚的工夫を。
- 6) 時には、スキット(寸劇)風にしてくださっても良いですね。

伝道地便りは、私たちが自分の証をするときの練習になります。主の愛の証のために、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」紹介しましょう。

1. 1万人に1人のアドベンチスト

セルビア



ラデンコ・メロヴィ 58歳

ラデンコ・メロヴィにとって、大学進学は素晴らしい出来事でした。

彼は両親を村に残し、300キロ離れたベオグラードの大学の寮に入りました。その寮には1万人の学生が住んでいました。

ラデンコは毎日楽しく過ごし、あまり勉強しませんでした。

1年が過ぎましたが、ラデンコは1つも試験を受けませんでした。

大学寮から追い出されるのを避けるため、彼は次の年は専攻を変えました。

2年が過ぎました。ラデンコはやはり試験を受けませんでした。

そしてまた専攻を変えました。

3年目も過ぎました。でもやはり試験を受けませんでした。

勉強する代わりに、ラデンコはパーティーをして、友だちとお酒を飲んでタバコを吸いました。彼は人気があったので学生会の会長に選ばれまし

た。

大学生活の4年目、悲劇が起きました。姉が出産中に亡くなったのです。

ラデンコは打ちのめされました。姉は家族にとって天使のような存在でした。どうしたらよいかわからなくなった彼は、生まれて初めて真剣に祈りました。そして神様に、歩むべき道を示してくださいと願いました。

1万人の寮生の中に、1人だけセブンスデー・アドベンチストの学生がいました。エミリアという名前の若い女性です。ラデンコの祈りのすぐ後で、友だちが2人を引き合わせました。

エミリアはすぐに神様について話し始めました。神様以外のことは話しませんでした。そしてラデンコに、自分はセブンスデー・アドベンチストだと告げました。ラデンコはアドベンチストについて聞いたことがありませんでした。エミリアが土曜日に一緒に教会に行こうと誘ってくれたので、彼は行くことにしました。

説教を聞いたラデンコが帰ろうとしていると、青年担当の牧師が彼を呼び止めて「聖書を学んでみませんか」と言いました。

ラデンコはそれまで聖書を読んだことがありませんでした。そして火曜日の夜に、その牧師と会うことにしました。

初めての聖書研究が終わると、ラデンコは何だか不思議な感覚になりました。空を飛べるような気持ちになったのです。今までずっと満たされることのなかった渇きが癒されたのでした。

ラデンコと青年担当の牧師は毎週一緒に聖書を学びました。そしてある日、安息日についての学びに入りました。

ラデンコは、聖書が土曜日を安息日としていることを知り驚きました。そして確認のため、翌日

カトリックの司祭のところに行きました。

「イエス様がいつ復活なさったか知っていますか？」と司祭は聞きました。ラデンコは「日曜日です」と答えました。

「だから日曜日に礼拝をするのですよ」と司祭は言いました。

ラデンコは司祭と交わした会話を牧師に伝えました。牧師は、イエスの死と復活は律法を変えてはいないと説明しました。十戒の第4条は今も、安息日は第7日だと言っているのです。

ラデンコはまた司祭のところに行きましたが、この間話した人はいませんでした。別の司祭が質問に答えて、「教皇様たちが日曜日にする決めたのです。私はあの方たちの意見に疑いを持つことはありません」と言いました。

ラデンコはその答えを聞いて驚きました。「聖書と教皇、権威があるのはどちらですか？」と聞きましたが、司祭は答えませんでした。

ラデンコは、権威があるのは明らかに聖書の方だと思いました。

現在、ラデンコは58歳で、妻がいて、大学も卒業しています。彼は神様の掟をととても大切にしています。彼はバプテスマのときに牧師が読んだ聖書の箇所を、青いマーカーで線を引いています。それはヨシュア記1：8で、「この律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜も口ずさみ、そこに書かれていることをすべて忠実に守りなさい。そうすれば、あなたは、その行く先々で栄え、成功する。」とあります。

大学の寮で出会ったエミリアは、30年前にまいた種が実を結んだことを聞いて驚き喜びました。彼女はラデンコと会ったあとに大学の寮を出ていて、連絡が取れなくなっていたのです。

「1万人の中にいる、たった1人のアドベンチストに出会えるなんて、本当に奇跡でした。これは、神様に歩むべき道を示してくださいとお願いしたことへの返答だったのです」

ラデンコは、今回の13回献金で新しい教会堂を建てようとしているノヴィ・ベオグラード・セブンスデー・アドベンチスト教会の長老です。教会が組織された1993年当時は、映画館を借りて

集会をしていました。今はノヴィ・ベオグラード近郊の別のアドベンチスト教会と建物を共有しています。皆さんの13回献金のご用意を感謝します。

〈お話のヒント〉

- bit.ly/Radenko-Melovic で、ラデンコの姿を見ることができます。
- フェイスブック (bit.ly/fb-mq) または ADAM S (bit.ly/one-adventist-in-1000) で、このお話の写真をダウンロードできます。
- 13回献金のプロジェクトの写真を bit.ly/ted-13th-projects からダウンロードできます。

豆知識

- 歴史上もっとも偉大な発明家と言われるニコラ・テスラは、セルビア人でした。テスラは電流や磁気分野で大きな発見をして、磁場の単位には彼の名前(テスラ)が使われています。アルバート・アインシュタインがノーベル賞を受賞したとき、記者に「世界一賢い人というのはどんな気持ちですか？」と聞かれ、「わからないね。ニコラ・テスラに聞いてくれ」と答えました。アメリカの電気自動車メーカーの社名「テスラ」は、彼にちなんでつけられました。

2. 間違った選択

ポーランド



マリウス・マイコウスキ 55歳

ポーランドの刑務所で、7人の服役囚がバプテスマのための準備ができました。何か月も毎週礼拝に出席した後に、ついに決心をしたのです。

でも、どこでどうやってバプテスマを受けさせたらよいのでしょうか。

マリウス・マイコウスキ牧師は良いことを思いつきました。もうすぐ開催される若者のキャンプミーティングの時に、バルト海でバプテスマを授ければよいのです。

マリウスは刑務所長に、囚人たちを4日間外出させる許可を求めました。行きの移動に1日、キャンプミーティングに2日、そして刑務所への帰りに1日です。ポーランドの法律では、刑期の3分の2を終えた模範囚は短期間外出することができます。

刑務所長は7人のうちの6人に、ヤロスワビエツへの400キロの旅を特別に許可しました。次の週、マリウスは他の何人かの教会員と一緒に刑務所に着き、囚人たちを駅に連れて行きました。

ユレックという囚人も、バプテスマのことを聞いて自分も受けることにしました。彼は刑期の3

分の2は既に服役していて、他の人よりも1日早く刑務所を出て、列車の中でアドベンチストのグループと合流することになっていました。

電車の旅はとても楽しいものでした。教会員がギター弾き、みんなで楽しく賛美歌を歌いました。

旅の途中、列車はユレックが乗ってくるはずの駅で停車しました。しかし彼は現れませんでした。

安息日に、6人の囚人はバルト海でバプテスマを受けました。

その2日後、看守と他の囚人たちは、6人全員が帰ってきたのを見て驚きました。何人逃げだすか、賭けをしていたのです。

けれどもユレックは戻って来ず、彼に逮捕状が出されました。

警察に追われていたので、ユレックは仕事に就けませんでした。彼は他の犯罪仲間と一緒に隠れ、17歳の弟もその仲間に引き込みました。

ある夜、ユレックと弟はひどく酔っぱらってポーランド北部のトルンという町の公園にいました。そこに1人の看護師が、リンゴの入った袋をかごに乗せた自転車で通りかかりました。ユレックと弟は彼女を襲い、乱暴し、絞め殺しました。

警察の捜査の末、ユレックと弟は刑務所に入れられました。

それから20年の間、ユレックの一件はマリウスを苦しめ続けました。ユレックはもう少しでバプテスマを受けるところだったのです。もしあのとき列車に乗っていれば、と惜しまれました。

ある日、ポーランド東部の町ルブリンで牧師として働くマリウスのところに、女性の教会員がやってきました。彼女は、妹が服役経験のある人と付き合っていて、その人には泊まる場所がないと言いました。

「その人は聖書についてよく知っているんですよ。教会として、助けてあげられませんか」と彼女は言いました。

牧師は、そのトメックという男性に会いました。確かに彼は聖書についてよく知っていて、それから教会を訪ねてくるようになりました。アドベンチストの大家が彼にアパートの部屋を貸しました。

けれどもトメックは神様に深い恨みを持っていました。そして聖書の研究によく怒りを爆発させ、神を呪いました。

「あんたが神を信じているのは、いい家庭に育って、いい生活をしているからだろ。俺はひどい家に育ったんだ。おやじも兄貴たちも犯罪者で、母親は飲んだくれた。兄貴たちは俺のスープに唾を吐くようなやつらだ。俺を性的に暴行した兄貴もいた。それでどうやって神が良いだなんて言えるんだ！」

マリウスはどう答えたらよいかと考えました。そして聖書研究のとき、たった一度の間違った決断で人生が狂うことがあることを話しました。ユレックのことを考えながら、彼のことを例として話しました。

「トメック、いいかい。この人は本当に神様に近いところにいたんだ。でもたった一度の間違った決断で、自分だけでなく弟の人生も狂わせてしまったんだよ」

トメックは真っ青な顔をして、ものすごい目でマリウスを見ました。マリウスは怖くなりました。アパートの部屋で二人きり。マリウスはトメックが以前殺人で服役していたことを思い出しました。

トメックは泣き出しました。そして泣きながら「こんなことってあるかい」と言いました。

「いったい何のことだい、トメック」マリウスは聞きました。

トメックは牧師の目を見て言いました。「俺がユレックの弟なんだよ」

現在、トメックはバプテスマを受けることを考えています。そしてお酒も止めようとしています。アルコール中毒者のリハビリ施設での彼のふるまいに影響を受け、2人が既にバプテスマを受けました。兄のユレックはまだ刑務所にいます。

「ユレックの件は、神様に近いところにおいて、神様のみ声を聴いたなら、すぐに決心をすること、遅らせてはならないということを教えてください」

とマリウスは言います。

イザヤ 55：6に、「主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。呼び求めよ、近くにいますうちに」とある通りなのです。

「このお話は、悲しい面もありますが、神様の素晴らしい力と、神様が私たちの人生にしてくださいることも教えてください。20年も経ってからユレックの弟に会い、神様のことを教えられるなんて素晴らしいとは思いませんか」

2017年の13回献金を捧げてくださって感謝します。そのお金でポーランドのホープ・チャンネルのテレビスタジオを作り、ポーランド語を話す人々に福音を伝えることができました。

〈お話のヒント〉

・bit.ly/Mariusz-Maikowski で、マリウスの姿を見ることができます。

・フェイスブック (bit.ly/fb-mq) または ADAM S (bit.ly/one-bad-decision) で、このお話の写真をダウンロードできます。

・13回献金のプロジェクトの写真を bit.ly/ted-13th-projects からダウンロードできます。

宣教メモ

- ・ポーランドの最初のアドベンチスト教会は、現在のロシアにあります。1888年に、J.ローバンと H.スクボウイツが、クリミアから当時のポーランド東部にやってきました。彼らはそこで3年働き、ヴォルイーニのツアルノフカに教会を建てました。

3. 友なき人の友

フィンランド



ローリ・ヘラネン 60歳

ローリ・ヘラネンは、重苦しい顔で、フィンランド南部の町ミッケリにある友人の墓の前に立っていました。

同い年の友人は3年前に血栓が心臓から脳に移動して亡くなっていました。

「墓の中にいるのは僕だったかもしれない」とローリは考えました。

心の中の声が、「今の生活を続けるとどうなるかわかっているはずだ。本当にそれで良いのか？」と言うのが聞こえました。

ローリはそのとき45歳でしたが、その質問に答えることができませんでした。その声はそれから毎日「死んだらどうなるか、わかっているな。死んだらどうなるか、わかっているな」と心の中に語りかけてきました。

恐怖の中、彼は子どものころ聞いたイエスの再臨のことを思い出しました。その時、悪い人たちは永遠に燃える地獄に投げ込まれると教わったのです。彼にはクリスチャンの友人はいませんでしたし、誰にこの不安を話したらよいのかわかりませんでした。

事態は更に悪くなりました。耳の感染症で病院に行くと、前立腺がんだと診断されたのです。死への予感が、今や真に迫ったものとなりました。

ローリは勇気をふるって、キリスト教の牧師に話をしに行きました。牧師はローリの罪が許されるようにと祈り、ローリにも許しを求めて祈るように言いました。

祈っていると、ローリの中で何かが起こりました。彼は罪を十字架の下に置き、平和と喜びに満たされました。

ローリは、熱心に聖書を読み始めました。驚いたことに、ルカによる福音書に、安息日は土曜日だと書いてあるところがありました。彼は安息日が土曜日から日曜日が変わったと述べている場所を探そうと新約聖書を3回読みましたが、どこにも見つかりませんでした。

そのころ、地元のセブンスデー・アドベンチスト教会で伝道集会があるという新聞広告を見ました。1年も経たないうちに、彼はその教会の一員になりました。

ローリの妻は彼が神様に関心を持つことを認めず、離婚を申し立てました。その2年後、ローリはアドベンチストであるパイヴィという女性と結婚して、彼女の故郷のラハティに引っ越しました。

ローリはラハティでイエス様のことを伝えたいと願っていました。多くの祈りの後、彼は、ラハティ・セブンスデー・アドベンチスト教会に、食堂を開くという考えに心動かされました。

「ほとんどのフィンランド人は非常に世俗的で、暮らしの中心は物質的なものや世間的な楽しみです。生活に神様の入る余地はありません。それで私はどうしたら彼らの心に訴えかけられるか考えました。食堂というのはその1つの手段です」

週に2回の食事を目当てに教会を訪れる人の中には、建設現場の労働者や年配の人たちがいました。多くはフィンランド人ですが、ロシア人もい

ます。経済的な困難に直面している人もいます。ほとんどの人が孤独で、友情を求めています。ローリがクリスチャンの友だちを求めていたのと同じです。

「フィンランドの社会では、他人に個人的なことを話すのは難しいのです。特に信仰については難しいです」とローリは言います。

最初のうち、食堂に来る人はほんの少しでした。けれども5年経った今、毎週月曜日と水曜日に40人がやってきます。この食堂は何百人もの人々の心に触れ、少なくとも1人がバプテスマを受けました。

この食堂は、消極的だった教会員もひきつけました。何年も礼拝に出席していなかった人が奉仕に来て、徐々に教会生活へと戻ってきました。

ローリは現在60歳です。がんの治療もうまくいって、健康な彼は、もう死を恐れてはいません。

ローリはこう言っています。「私の人生は今イエス様の手の中にあります。再臨が待ちきれません。もう私は死ぬことが怖くはありません」

〈お話のヒント〉

- bit.ly/Lauri-Herranen で、ローリの姿を見ることができます。
- フェイスブック (bit.ly/fb-mq) または ADAMS (bit.ly/friend-to-finland) で、このお話の写真をダウンロードできます。
- 13回献金のプロジェクトの写真を bit.ly/ted-13th-projects からダウンロードできます。

宣教メモ

- フィンランドのセブンスデー・アドベンチスト教会は、短期大学であるフィンランド・ジュニア・カレッジ、老人ホーム、出版社、聖書通信講座とメディアセンターを管理しています。
- フィンランドにおける最初のセブンスデー・アドベンチストは、船長の A.F. ルントクヴィストでした。航海中に彼はプリマス・ブレザレンによって改宗しました。1885年に、彼はユライア・スミスの『ダニエル書と黙示録』という本をイギリスの文書伝道者ジョージ・ドリユーから買いました。また、E.G. ホワイトの『各時代の争闘』も買いました。これらの本を読んだ彼はすぐに安息日を守るようになり、セブンスデー・アドベンチストになりました。そして忠実な歩みを続け、1955年に97歳で亡くなりました。
- フィンランドには62の教会、9つの会社があり、教会員は4,678人です。人口が5,518,000人なので、人口の1,180人に1人が教会員ということになります。
- フィンランドの公用語はフィンランド語です。90%の人がこれを母語としています。スウェーデン語を母語とする人は人口の5.4%です。この土地独自のサーミ語はラップランド北部の公用語となっています。
- フィンランド人の牛乳の1人当たりの年間消費量は世界一です。

4. 靈的盲人への説教

ノルウェー



オイスタイン・ホガンビック 61歳

ノルウェーで、2人の男性が説教をしていました。

最初の説教者は良い身なりをしていましたが、後ろの方の席で聞いていた作業着姿の農場経営者の目には、少し横柄に見えました。

その説教者は本を開いて、セブンスデー・アドベンチスト教会の設立者の1人であるエレン・ホワイトの言葉を読みました。それからまた別の本を開いて、エレン・ホワイトの別の言葉を読みました。彼の説教は全部、エレン・ホワイトの本からの引用でした。

その説教を聞いても、30歳の農場経営者、オイスタイン・ホガンビックの心はまったく動きませんでした。

次に2人目の男性が立ち上がって説教を始めました。彼も良い身なりをしていましたが、そのスーツは古びていて、何度か繕った跡がありました。靴も、磨かれてはいましたが、履き古されていました。この男性は、本はあまり読みませんが、心からの説教をしました。

その説教者の熱心さはオイスタインの心を動か

しましたが、説教のテーマにはとても反感を覚えました。まったく気持ちを害されたと言ってもよいくらいでした。

説教の後、説教者はオイスタインに気づき、近づいてきました。彼は挨拶すると、丁寧に名前を尋ねました。そして彼の仕事と家族について聞きました。説教については一言も話しませんでした。

数分後、説教者はオイスタインのために祈ってもよいですかと聞いてきました。祈っているうちに、オイスタインの心に大きな葛藤が生まれました。「説教には猛反発しているのに、その人に祈ってもらうなんて、どういうことだ」と思ったのです。

するとすぐに、オイスタインは主がこう言うのを感じました。「私を信じなさい」

農場に戻ると、オイスタインは、説教者が間違っていることを証明することにしました。そして何時間も聖書を読んで過ごしました。自分のひっかかったテーマについての説教を録音したのも聞きましたが、アドベンチストの説教者たちは様々な見方をしていることがわかりました。イエス様が彼からそっと立ち去って行っているように感じました。1年が過ぎ、彼は完全に混乱していました。

ある日、オイスタインはマルコ 10：46～52にある、イエス様が盲人のバルティマイを癒した話を読み返していました。読むうちに、彼は自分自身がバルティマイであることに気づきました。実際の視力には自信があったのですが、靈的には盲人であり、イエス様に目を開いてもらわなければならないのでした。

オイスタインは「私に靈的な視力をください！」と叫びました。

すぐに、彼はルカ 24章の2人の弟子たちがエマオへの道中、そうとはしらずにイエス様と歩いてたお話に導かれました。イエスは歩きながら

彼らに、ご自身についての聖書研究をしてくださったのですが、2人はそれがイエス様であることに気づきませんでした。家に着いて食事をするときになって初めて、2人の目が開かれたのでした。

オイスタインは、12弟子たちも3年以上イエス様と一緒にいながら、その使命と十字架については霊的盲人のままであったことを思い出しました。

そして、アドベンチスト5世である彼自身も、今までの人生でずっとイエス様と歩きながらも、霊的な盲人であることに気づきました。なぜなら聖霊に目を開いていただくことを求めずに、自分自身の解釈にしがみついていたからです。イエス様が立ち去るのではなく、自分自身がイエス様から離れていく危機の中にありました。自分にとっての真実を大切にすぎていたからです。

説教者が間違っていることを証明しようとしていた間、彼は一度も主に目を開かせてくださいと祈ってはいませんでした。説教者の間違いを明らかにしたいだけだったのです。

オイスタインは初めて、目を閉じて、目を開かせてくださいと祈りました。

「その日以来、聖書は私にとって生きた書物となりました。福音書の中の一つ一つのお話は、もう単にイエス様の時代に生きていた人の物語ではありません。私に関係のある話であり、私に何かを教えてくれるものなのです」

聖書やホワイト夫人の本を録音したものは、長い農業作業の間に活用されました。彼は心を入れ替え、知的な知識は、生きた、現実的な実用性のあるものになりました。

1年後、オイスタインは自分の経験をノルウェー中の教会で証して回りました。しばらくすると、東ノルウェー教団は彼に牧師として働いてほしいと申し出ました。

現在オイスタインは61歳で、農場はまだ所有していますが、自分の時間と精力を福音の種をまくことに使っています。この9年の間フルタイムの牧師として働いていて、オスロとイエスハイムの教会を導いています。

オイスタインは、教会で、母親がオルガンを弾き、祖父が説教をするのを最前列で見聞きしながら

ら育ちました。彼は17歳でバプテスマを受けました。彼はずっとアドベンチストとして過ごし、ずっとアドベンチストでありたいと思ってきました。けれどもイエス様に目を開いてくださいとお願いするまで霊的盲目であったと、彼は言っています。

「あのときから、聖書とホワイト夫人の本は、私の命です」

2017年の13回献金を感謝します。その献金によって、オスロにあるベテル・セブンスデー・アドベンチスト教会の地下室を若者のためのコミュニティーセンターに改装することができました。

〈お話のヒント〉

- bit.ly/Oystein-Hogganvik で、オイスタインの姿を見ることができます。
- フェイスブック (bit.ly/fb-mq) またはADAMS (bit.ly/preaching-to-blind) で、このお話の写真をダウンロードできます。
- 13回献金のプロジェクトの写真を bit.ly/ted-13th-projects からダウンロードできます。

宣教メモ

- デンマーク語とノルウェー語の新聞であるアドベント・ティデンテは、初めてのセブンスデーの非英語圏の定期刊行物です。刊行したジョン G.マテソンは、アメリカに移住したデンマーク人です。

5. 離婚後の赦し

トランス・ヨーロッパ支部



メアリー

メアリーは 30 歳のときに夫と離婚しました。それには聖書的な背景があったのですが、理由は誰にも何も言いませんでした。個人的なことを公にしたくなかったからです。そのうえ、元の義理の家族は、彼女が離婚後も通う地元のセブンスデー・アドベンチスト教会で尊敬されている教会員だったのです。

教会員たちは、メアリーの結婚生活が終わったわけを知りませんでしたので、彼女を責めました。彼女は夫の元から去ったことで救いを失ったと言ってくる人もいました。メアリーはアドベンチスト教会で育っていましたが、安息日に礼拝することをやめ、新しい生活を始めるためについに国の反対側に引っ越しました。

けれども悪魔が内側から彼女を苦しめました。新しい街で彼女の離婚を責める人はいませでしたが、彼女はそれを忘れることはできませんでした。自分が失敗者であるように感じました。そして、離婚しても神様は自分を愛してくださるだろうかと思いました。

答えを求めて彼女はネットで「神様」を検索し

ましたが、莫大な数の検索結果に圧倒され、コンピューターの電源を切ってしまいました。

テレビをつけて様々な番組を見ました。キリスト教のカリスマ派によるチャンネルが彼女の目を引きました。けれどもその信仰療法や、異言を語るのを見て、怖くなり、それは見ないことにしました。そして女性の説教者による番組を見つけました。彼女は穏やかに知的に語りました。メアリーはそれを何週間か見続けました。

ある晩、その女性は赦しについてこう話しました。

「自分の力で人を赦すことはできません。神様に手伝っていただかなくては無理なのです」

翌日、通勤中の車の中で、この言葉がよみがえってきました。彼女は、自分は元夫とその両親、いじわるな教会員たち、何より、自分自身を赦さなければならぬことに気づいてハッとしました。

そしてどうしても神様に助けを求めて祈らなければならないという思いに突き動かされました。泣きながらも祈ろうとしましたが、涙のせいで、運転しながら祈ることは不可能でした。そこで車を停車させました。

「私は赦したいのです。でもそれができないのです。もし赦しの賜物をいただけましたら、私はあなたに従います」とメアリーは祈りました。

するとすぐに返事がきました。「あなたを助けます」という男性の優しい声が聞こえたのです。

メアリーはさらに激しく泣きましたが、これは喜びの涙でした。天が彼女の祈りを聞き、助けを約束してくださったことがわかったのです。メアリーはその後も 30 分間、停車中の車の中にいました。神様に従うという約束をしたのですが、どのようにしてそれを守ったらよいのかわからなかったのです。

「私はアドベンチストとして育ったのです。どうやって生きてらよいのでしょうか」と彼女は祈り

ました。

心の中に返事がきました。聖書とエレン・ホワイトの本を読むのです。

メアリーは家に帰って顔を洗い、職場に行きました。1時間の遅刻でした。

仕事の後、メアリーは聖書を開いて読み始めました。時間があるといつも読みました。夜眠れないときは、起きてまた読みました。今まで本を読むのが楽しかったことはなかったのですが、今は読むことに対する飽くことのない情熱に動かされているようでした。

「私がこのように読んだのは、神様が誰なのかを知らなければならなかったからです。心の底から飢えていたのです」とメアリーはあるインタビューで話しています。

彼女は1年で聖書を3回通読し、エレン・ホワイトの大争闘シリーズも全部読みました。

彼女は勇気を出して、地元のアドベンチストの牧師に自分の離婚について話しました。牧師はメアリーのために聖書研究グループを作りました。この聖書研究グループをきっかけに、メアリーが教会に、そして神様に戻ってこられるようにと願ったことでした。

メアリーはこのグループが気に入りました。

「私は熱心に学びました。それ以前の読書から得られたもので満たされていたからです」と彼女は言っています。

伝道集会の後、メアリーは安息日の礼拝にも定期的に出席するようになりました。

それからしばらくして、彼女は元の義理の家族に会いました。驚いたことに、恥ずかしいとも思わなかったし、つらい気持ちにもなりませんでした。彼らは友達になりました。

メアリーはまた、いじわるなことを言った教会の人たちのことも赦しました。その人たちの名前も思い出せないくらいです。

「とても赦された気持ちがします。心は平安です」と彼女は言っています。

現在メアリーは、地元の教会で熱心に活動しており、トランス・ヨーロッパ支部の13回安息日プロジェクトのリーダーです。今も聖書を毎日読んで

いて、毎年一度は通読しています。そしてエレン・ホワイトの著作を毎日一時間読んでいます。

インタビューの中で、神様が周りの人と自分を赦すことができるよう助けてくださったことを話すとき、彼女は涙を浮かべました。

「私は赦しの賜物をいただきました。このことは神様と私の関係を永遠に変えてくれたのです」

〈お話のヒント〉

・メアリーは仮名です。彼女の親せきや教会員たちのプライバシーを守るため、彼女の本名とどこに住んでいるかは明らかにしません。

・フェイスブック (bit.ly/fb-mq) または ADAM S (bit.ly/forgiveness-after-divorce) で、このお話の写真をダウンロードできます。

・13回献金のプロジェクトの写真を bit.ly/ted-13th-projects からダウンロードできます。

6. 靴磨きの友になる

キプロス



フィリップ・ドミトロフ 49歳

ユリアン・ヤンコフ 49歳

キプロスの首都、ニコシアでの出来事です。ある日、靴磨きをしている男性がフィリップの目を引きました。

その服にはタバコの煙のむっとするにおいが染みつき、手はアルコール中毒のせいで震えていました。

フィリップは靴を磨くことは頼みませんでした、ブルガリア語でこう話しかけました。

「やあ、こんにちは。調子はどうですか。何か困っていることはないですか？」

話しかけられたユリアンは、驚いたようでした。10年前にブルガリアからやってきてからというもの、このようなことを聞かれたのは始めてでした。誰かが興味を持ってくれるのは嬉しいことでしたが、ユリアンは黙ったままでした。

「イエス様は、私たちがどんな状態にあっても、1人1人を愛してくださっているんですよ。私たちに命を捧げてくださったのです」とフィリップ

は続けました。

イエス様という名前がユリアンの心に残りました。

翌日、フィリップはまたやってきました。

「やあ、こんにちは。調子はどうですか。何か困っていることはないですか？」

ユリアンは、彼がまたやってきたことにびっくりしました。この時も、フィリップは靴を磨いてくれとは言いませんでした。その代わりに、ユリアンに、お酒とタバコにお金を無駄に使わないほうがよいと勧め、「お金は少し取っておいた方がいいですよ」と言いました。

フィリップは毎日ユリアンと話しました。徐々に、2人は自己紹介をして、話をするようになりました。ユリアンは家族とキプロスに引っ越してきてから建設現場で働いていたことを話しました。けれども失業してしまい、飲酒のせいで家から追い出されていたのでした。

「家族は私を拒絶しました。仲の良かった友人たちも1人また1人と去っていきました」とユリアンは言いました。

ある日、ユリアンは新しい友人を、自分が寝起きている廃屋に連れて行きました。その光景を見て、フィリップの目に涙が浮かびました。ユリアンは固い床の上に寝ていました。持ち物は、今着ている服のほかには何もありませんでした。稼ぎはすべてお酒とタバコに消えていたのです。

「行き着くところまで来てしまった感じですね」フィリップは優しく言いました。「あなたは人生を台無しにしています。何とかしなくてはダメですね。あなたには助けが必要です。神様には不可能なことはありません。神様はあなたを愛しておられるんですよ」

フィリップはユリアンに神様について話し、一緒に祈るようになりました。ユリアンはフィリップが自分の中に何か大切なものを見つけてくれた

ことを感じました。自分の人生の中に神様の愛を見いだせるようになったのです。

ある日フィリップは言いました。「もうすぐ 50 歳になりますね。でもあなたは今までサタンにしか仕えてきませんでした。キリストに人生を捧げる時が来ましたよ。キリストがあなたを祝福してくださいませ」

ユリアンは自分を変えたいと思いました。そして、「神様に人生を捧げる準備はできています」と言いました。

35 年間ずっと深酒をしてきた彼は、その日のうちにお酒を止めました。35 年間ずっとヘビースモーカーでしたが、1 週間後にたばこも止めました。

フィリップとユリアンは一緒に聖書を勉強しました。2 人はフィリップがキプロスの各地で開いているブルガリア語での聖書研究グループに行きました。

ユリアンは、ブルガリア人のフィリップが、地中海の島々にあるセブンスデー・アドベンチスト教会に雇われた、フルタイムの信徒伝道師だということを知りました。この 3 年のフィリップの働きで、8 人がバプテスマを受けました。これは人口 110 万人に対し、103 人しか教会員のいないこの国のアドベンチストにとっては、大きな数字です。

ユリアンは 2018 年 6 月 23 日に地中海の水の中に沈み、9 人目のバプテスマとなりました。

バプテスマを受けてから、ユリアンの人生には良いことが起こるようになりました。ホテルの厨房での仕事が見つかりました。安息日に仕事を休むことを許してくれましたが、これはキプロスでは珍しいことでした。家族は彼を喜んで迎え入れました。

彼は、聞いてくれる人には誰にでも、自分が神様をどんなに愛しているかを伝えています。

彼はインタビューでこのように語っています。「バプテスマを受けた日から、神様が私の人生にしてくださったこと、そして 1 人 1 人にしてくださろうとしていることを褒めたたえずにはられません。誰かに出会うと、私に何が起こったかを話すのです。そして『神様が私にこれだけのこと

をしてくださったのだから、あなたにも同じようにしてさせていただきますよ』と言っています」

〈お話のヒント〉

- bit.ly/Yulian-Jankov で、フィリップとユリアンの姿を見ることができます。
- フェイスブック (bit.ly/fb-mq) または ADAMS (bit.ly/befriending-shoeshiner) で、このお話の写真をダウンロードできます。
- 13 回献金のプロジェクトの写真を bit.ly/ted-13th-projects からダウンロードできます。

宣教メモ

- キプロスに行った最初のセブンスデー・アドベンチストは、アルメリア人のモーゼス・ブルサリアンです。1912 年、彼は家族と一緒にトルコのアンティオキアからキプロスに逃げてきました。彼は何年も、家族の作った櫛をひそかに売りながら、ロバに乗って村々を巡り、近所の人に彼の信仰を伝えました。息子のジョンは後にキプロス島で最初のアドベンチストの文書伝道者になりました。